

看護実践研究センター報告書

令和元年度

目 次

I	はじめに	1
II	令和元年度事業報告	2
	1. なごや看護生涯学習セミナー	2
	【看護研究セミナー】	
	(1) 看護研究いろはの「い」	
	(2) 看護研究いろはの「ろ」	
	(3) 看護研究いろはの「は」	
	【看護実践セミナー】	
	(1) 家族支援における対話に新しい風を ～オープンダイアログの紹介・体験～	
	(2) 心不全、呼吸不全、脳血管疾患の検査結果の見方・読み方と病態	
	(3) 患者急変対応「何か変、と思ったとき・・・」	
	(4) ラップ（元気回復行動プラン：WRAP®）体験クラスワークショップ	
	2. なごや看護生涯学習公開講演会	15
	3. 地域連携セミナー	17
	4. 看護研究サポート	19
	5. 昭和生涯学習センター共催講座	21
III	今後の課題	23

名古屋市立大学大学院看護学研究科
名古屋市立大学病院看護部

I はじめに

看護実践研究センター（以下、本センター）は8年目を迎えた。本年度もこれまでと同様になごや看護生涯学習セミナー、なごや看護生涯学習公開講演会、地域連携セミナー、看護研究サポート、昭和生涯学習センター共催講座を企画した。各事業の共通する目的は、現場で活躍している保健医療職者の専門性を高めることであり、それにより地域の保健・医療・福祉への貢献を目指している。その詳細は以下に述べるとおりであり、学外講師、看護学研究科教員や大学病院看護師の皆様の多大な協力を得て参加者にとって有意義な事業となっている。

大学では、教育・研究だけでなく社会貢献も必須である。働き方改革による時間外労働の上限規制や年次有給休暇の取得義務のなかで、より効果的に事業を展開するための工夫が必要である。本報告書では、本年度の社会貢献事業の実績を報告するとともに、事業を継続するための課題を述べる。

II 令和元年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：杉浦和子、福留元美、吉松由子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。本年度は看護研究セミナー3件、看護実践セミナー4件を開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	セミナー実施の承認・検討 テーマおよびセミナー担当者募集開始
5月	テーマ申込み状況の把握 全テーマの開催日程、場所決定、教室予約 セミナー当日の役割分担、アンケートの検討 チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定
6月	参加申込方法（メール申込、FAX申込）の検討 チラシ、受講カード、アンケートの決定 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討
7月	チラシ印刷発注 チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計140箇所）
8月	看護実践研究センターホームページで告知開始 参加者募集開始、受講生に受講カードの送付
9月 ～12月	セミナー申込み締切（各セミナーの日程により申込み締切を延長） 事務に領収書の依頼 情報処理室のパソコン使用IDカード準備（事務へ依頼）各セミナー実施 実施前：受講者数の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載 【看護研究セミナー】 ・看護研究いろはの「い」（10/4） ・看護研究いろはの「ろ」（10/11） ・看護研究いろはの「は」（10/21） 【看護実践セミナー】 ・家族支援における対話に新しい風を～オープンダイアログの紹介・体験～（12/2）

	<ul style="list-style-type: none"> ・心不全、呼吸不全、脳血管疾患の検査結果の見方・読み方と病態 第1回(10/17) 第2回(10/24) 第3回(10/31) ・患者急変対応「何か変、と思ったとき・・・」(11/9) ・ラップ(元気回復行動プラン: WRAP®)体験クラスワークショップ (11/16)
--	---

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講師：脇本寛子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：第1回 令和元年10月4日（金）9時～16時

場所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室

募集人数：20名

参加者：8名

参加費：3,000円



〈内容〉

昨年度までは、2日×2時間（18時30分～20時30分）で開講していたが、今年度は1日6時間（9時～16時、1時間休憩）で開講することとした。到達目標は、5項目（①看護研究の定義、看護研究のプロセスに関する基本的事項を理解する。②日常の実践における疑問を文章化し、研究疑問として表現する。③研究論文を読み、研究論文の構成要素を理解する。④文献検討の意義と基本的な方法を理解する。⑤研究計画書の構成要素を理解する。）とした。これらに沿って講義、グループワーク、個人ワークを組み立てた。配布資料は、講義資料、参考文献2件（量的研究、文献研究）とした。

講義は、10項目(①はじめに、②看護研究とは、③看護研究のプロセス、④研究テーマ・研究課題の設定、⑤研究疑問、⑥研究論文の構成要素、⑦文献検索と文献検討、⑧研究デザイン、⑨倫理的配慮、⑩研究計画書の構成要素)の構成とした。午前(9時~12時)は①~⑥、午後(13時~16時)は⑦~⑩の内容とした。冒頭で、受講生に受講動機と特に学びたい内容について一人ずつ発言する機会を設け、受講生のニーズに合うように内容を調整した。

①はじめには、看護学になぜ研究が必要かを解説し、②看護研究とはでは、様々な文献を引用し看護研究の定義を提示し、看護研究を実施する意義について解説した。③看護研究のプロセスは、研究テーマの設定から研究成果の発表までのプロセスを解説した。このプロセスを基軸として、以降の項目の解説時には看護研究のどのプロセスに該当するかを確認しながら進めた。④研究テーマ・研究課題の設定では、手順、研究テーマの選択に関連する要因について解説した。⑤研究疑問に関する内容では、参考文献(量的研究)を題材として、参加者は2人1組となり研究疑問や研究目的は何かを討議する時間を設け、全体で意見交換を行い、解説した。次に、日常の実践における疑問を文章化し、研究疑問として表現する個人ワークの時間を設けた。受講生に守秘義務の遵守を確認した上で、一人ひとりの疑問を全体で共有し、日常の実践における疑問が研究疑問ひいては研究目的に昇華できるよう助言をした。⑥研究論文の構成要素は、参考文献2件を提示しながら、解説した。⑦文献検索と文献検討では、どのように検索語句を設定するのか、統制語、MeSH用語、シソーラス用語、上位語・下位語、文献の絞り込み方法について、検索画面を具体的に提示しながら解説した。参考文献(文献研究)を提示し、どのように文献検索を行うのか、文献検索の結果からどのように文献検討を行うのかを具体的に解説した。⑧研究デザインは、研究疑問により決まることを解説し、参考文献(量的研究)を提示し、特に、仮説、変数、母集団、標本について具体的に解説した。当初の予定では、参考文献を用いてグループワークをした後の解説を予定していたが、⑨倫理的配慮に関する受講生のニーズが高く、グループワークは割愛し、倫理的配慮に関する内容を丁寧に解説した。⑩研究計画書が作成できるよう、構成要素と留意点について解説した。

1日6時間の開講は、受講生にとって参加しやすく好評であり、集中して受講されていた。受講生のニーズに合うように内容を調整したこと、受講生一人ひとりの研究疑問に関してフィードバックを行ったことから、セミナーの理解度は良かったと考えられた。

〈アンケート結果〉

参加者8名の全員からアンケートの回答があった(回収率100%)。セミナー参加動機で最も多かったものは、「興味・関心があった」4名(50.0%)で、次いで「自分の看護のレベル・アップ」3名(37.5%)、「新しい知識を得る」3名(37.5%)であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」者は8名(100%)であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・先生が院生の時や臨床で困ったことなど具体例が入り、イメージしやすかった。
- ・1人ひとりへのアドバイスも参考になった。
- ・文献を調べたり、どういうデータを変数にしたら良いのか分かりやすかった。
- ・看護研究自体がよくわからなかったが、わかりやすく、看護研究をしてみたいと思

わせていただいた。話し方もゆっくりでしたので難しい内容も聞きやすかった。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講師：宮内義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：令和元年10月11日（金）9時00分～16時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理教室

募集人数：15名

参加者：9名

参加費：3,000円



〈内 容〉

今年は「量的研究の基礎」をテーマに、量的研究とはどのようなものであるかを知り、量的研究を行うために必要な基礎知識を学習し、量的研究でのデータ分析に必要な統計学の基礎と統計解析を理解し、活用するための方法を学ぶことを目的に講習を行った。基礎とは言え、馴染みのない方が多い数学的な内容であるため、グループワークやパソコンを用いた統計解析の演習を取り入れ、学びやすいように工夫した。

講習の概要は以下の通りである。

1) 研究デザインの分類と量的研究

まず、研究デザインにおける量的研究について概説し、次に、研究に当たって重要な論理的推論について概説した。さらに、量的研究の両翼となる観察研究と実験研究について詳説し、実験研究で問題となるバイアスについてはグループワークを通して理解を深めた。

2) 統計学の基礎と基本的な分析方法

データの代表値、基本的な統計量の説明から始め、正規分布、母集団と標本、信頼区間、仮説検定、帰無仮説、p値、有意水準、検出力、第一種と第二種の過誤、自由度、二項分布について詳説した。次に、t検定、符号検定、U検定、 χ^2 検定といった検定方法について考え方から計算方法まで詳細に説明した。

3) ソフトウェアを用いた統計解析の演習

統計解析に使えるソフトウェア並びに Web サイトを紹介した。次に、 χ^2 検定を用いる例題について、Excel、SPSS、EZR、Web サイト (js-STAR) を用いて解析の演習を行った。特に、Excel については χ^2 検定を順次行うシートを作成し、理論通りに計算を行うことで χ^2 検定が行えること、統計解析専用ソフトウェアと差異の無い結果が得られることの確認をした。

<実施後のまとめ>

受講にあたり Excel 使用経験を条件としたため、Excel の操作でつまづく受講生は少なく、後半の演習をスムーズに進めることができた。一方で、数学的な内容の説明では、一つ一つ理解の程度を確認しながら進め、理解が進まない部分は説明を繰り返したり、説明の表現を変えたりするなどが必要であった。内容を劣化させずにより分かりやすいものにしていくことが次年度の課題と考える。

<アンケート結果>

参加者 9 名の全員からアンケートの回答があった (回収率 100%)。セミナー参加動機で最も多かったものは「新しい知識を得る」の 3 名 (33.3%) で、次いで「自分の看護のレベル・アップ」2 名 (22.2%)、「必要に迫られて」2 名 (22.2%)、「興味・関心があった」2 名 (22.2%) であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」者は 5 名 (55.5%) で、「どちらかといえば難しかった」「難しかった」者は 4 名 (44.4%) であった。自由記載では、参加者のレベルが異なるため次のような様々な意見が挙げられた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・統計とは？というところから私は初めてだったので、内容と数字についていくのがとても難しかったが、統計について興味はもてた。
- ・頭の中でごちゃごちゃしていた統計の知識が整理できました。
- ・ソフトを用いた学習ができてよかった。統計については、もう一度ふりかえる学習が必要だと思った。

(3) 看護研究いろはの「は」

講師：益田美津美 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授)

日時：令和元年 10 月 21 日 (月) 10 時 30 分～15 時 30 分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室、401 情報処理室

募集人数：15 名

参加者：9 名

参加費：2,000 円

<内 容>

昨年度に引き続き、質的研究に関するセミナーを行った。

対象を「これから質的研究を行おうとしている看護保健職者」とし、質的研究とはどのようなものかを理解し、実際にデータ収集とデータ分析を行ってみることを目標に、4時間の講義、演習を行った。対象者のレディネスは、これまでに質的研究のみならず、看護研

究を行ったことがない方々であった。

10名の受講応募があったが、1名欠席したため9名の参加であった。少数クラスのセミナーとしたことで、受講者と対話しながらフレキシブルに行なうことができた。

概要は以下の通りである。

1) 質的研究とは (講義)

質的研究のプロセスを概説した上で、質的研究の様々な方法について紹介した。また、研究目的に沿ったデータ収集の仕方、データ分析の手順、データ収集・分析にあたって留意すべきことなどについて講義した。質的研究に関する主な疑問についても説明した。

2) データ収集・データ分析の実際 (演習)

半構造化インタビューを2人1組で実際に行い、逐語録を作成した。その後、逐語録に基づき、2グループに分かれてデータ分析の演習を行った。コードをハンドソートで分類・統合し、カテゴリー化を行った。カテゴリーが抽出され、ストーリーが見えてきた段階で、発表を行うという形で進めた。発表後は、各グループから抽出されたカテゴリーの共通点、相違点等について確認し、意見交換した。また、データ分析中に注意すべき点について、講師よりフィードバックした。



〈アンケート結果〉

参加者9名のうち、8名からアンケートの回答があった。(回収率88.9%)。セミナー参加動機で多かったものは「新しい知識を得る」5名(62.5%)で、次いで「自分の看護のレベル・アップ」4名(50.0%)であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」者は8名(100%)であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 質的研究のやり方がわかって勉強になった。
- ・ 象徴的で難しい内容でしたが、実際やってみたことでわかりやすく学べた。

【看護実践セミナー】

(1) 家族支援における対話に新しい風を～オープンダイアローグの紹介・体験～

講師：門間晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日時：令和元年12月2日（土）13時～17時

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：20名

参加者：8名

参加費：2,000円



〈内 容〉

1. オープンダイアローグ（OD）とは何か

フィンランドから導入されたODの発祥・実際、7つの原則、12の基本要素、日本での広がりなどについて、フィンランドでの研修ツアーの様子を含めて話題提供した。

2. 「聴く」「応答する」ための工夫

ODの基本である「聴く」「応答する」を同時に一人の人が行うことは難しい。人や時間を分けて「聴く」と「応答する」の体験、および対話の可能性を広げるためにODでは必須として用いられる「リフレクティング」を体験した。

3. ODの全体像の説明

時間的に厳しかったため、事例を出してもらってのロールプレイは行わず、一般的な事例でのOD展開のイメージが湧くように説明した。

4. 振り返り

対話の可能性として、ODが保健活動場面だけでなく、人材育成や事例検討等にも応用可能であることを伝え、全体的な質問や感想などを交換した。

〈所感〉

当初予定されていた10月12日（土）が台風接近のため中止となり、平日に再設定して実施

した。ほとんどの人がすでにオープンダイアログという言葉を知っており、本を読んでいる人もあり、情報や体験の場を探している方々であり、積極的に体験や意見交換に参加していただけた。一人一人の参加目的を尋ねて開始したが、それらに対してどうであったのかについては心配が残る。

〈アンケート結果〉

参加者 8 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機は「新しい知識を得る」「自分の看護のレベル・アップ」「興味・関心があった」の順であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」者は 8 名（100%）であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・本での知識を体験することで理解できた。
- ・オープンダイアログについて、分かりやすく丁寧でした。受講生のニーズを聞きながら、セミナーの内容を組み立ててもらい、有り難かった。

(2) 心不全、呼吸不全、脳血管疾患の検査結果の見方・読み方 と病態

講 師：薊 隆文（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日 時：第 1 回 令和元年 10 月 17 日（木）18 時 30 分～20 時 30 分

第 2 回 令和元年 10 月 24 日（木）18 時 30 分～20 時 30 分

第 3 回 令和元年 10 月 31 日（木）18 時 30 分～20 時 30 分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：20 名

参加者：10 月 17 日（木）11 名、10 月 24 日（木）11 名、10 月 31 日（木）10 名

参加費：3,000 円



〈内 容〉

①「心不全」の検査所見とその見方・読み方

心臓の解剖・生理・機能を概説し、心不全の時にどのような変化が、どのような検査所見として現れるのか、について画像検査・モニタリングなどを解説した。

②「呼吸不全」の検査所見とその見方・読み方

呼吸器の解剖・生理・機能を概説し、呼吸不全の時にどのような変化が、どのような検査所見として現れるのか、について画像検査・血液ガス・モニタリングなどを解説した。

③「脳血管疾患」の検査所見とその見方・読み方

脳の解剖を概説し、脳血管障害の時にどのような所見が現れるのかについて、CT・MRI・血管造影を中心に解説した。

〈アンケート結果〉

最終日参加者 10 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」「新しい知識を得る」「興味・関心があった」の順であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」者は 7 名（70.0%）で、「どちらかといえば難しかった」「難しかった」者は 3 名（30.0%）であった。

(3) 患者急変対応開催「何か変、と思ったとき・・・」

講 師：清水真名美、加藤紀子、寺澤涼子、稲尾景子

（名古屋市立大学病院・救急看護認定看護師、集中ケア認定看護師）

日 時：令和元年 11 月 9 日（土）9 時 30 分～16 時 30 分

場 所：名古屋市立大学病院 臨床シミュレーションセンター

募集人数：20 名

参加者：11 名

参加費：3,000 円



〈内 容〉

例年、参加申し込みが多く好評のセミナーであるため今年度も開催した。

このセミナーは、受講生が患者の急変前兆候に気づき、適切な処置を行ったり、医師などに報告したりすることで、患者が防ぎえた心停止・防ぎ得た後遺障害に至らないように対応できる能力を身につけることを目的としている。患者急変対応コース for Nurse ガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義され、患者が急変する 6～8 時間前には何らかの兆候が出ていると言われている。私たち看護師がその兆候を見逃さないようにするためには、患者の変化に気づき、対応の必要性を判断する能力、そして、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

急変前兆候に気付くかは観察者である看護師の予測範囲によって異なるため、私たち看護師は常日頃から急変に備えて患者を観察、評価し、患者の状態を判断できる能力を向上させることが必要である。そのためには患者の観察に必要な要素を系統的に観察できる知識が必要となる。このセミナーでは看護師が系統的に観察できるよう迅速評価、一次評価について学習する内容となっている。迅速評価とは、「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントする」ことである。そこで必要なことは、患者に「死に結び付く可能性のある危険な兆候」があるのかどうかを判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合、BLS を実施する。心肺停止状態になっていないが、危険な兆候があると判断した場合、応援要請を行いながら、さらに詳しく患者の状態を把握するために一次評価を行っていく。一次評価では、簡単な器具（血圧計、生体情報モニタ、聴診器、ペンライト、体温計）を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う。すなわち、患者が心停止にどの程度近づいているかを判断するために、「A・B・C・D・E」の視点で評価するのである。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBAR を用いた報告を医師などに行う。このような内容を学び、今後臨床場面で実践できるようセミナーの構成を考えた。

実際の方法を学び、実践できるようになるためには、シミュレーション時のデブリーフィングが重要と考えた。そのため、受講生同士がデブリーフィング時に活発なディスカッションできるよう、最初にアイスブレイクを行った。その後、講義で観察のポイントや観察方法を学び、机上シミュレーションで講義内容を受講生の知識として定着させ、理解を深めた。最終的に人形を使用した実働シミュレーションを行い、受講生同士でデブリーフィングすることで、臨床場面で実践できるところまで理解をすすめるという段階を経たセミナーとした。

〈アンケート結果〉

参加者 11 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったものは「自分の看護のレベル・アップ」の 10 名（90.9%）であった。セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」と回答した。また、急変対応のアドバンス編の開催希望があった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 観察項目や報告すべき優先順位を改めて整理することができた。
- ・ 人形を使うことで実際の状況をイメージしやすかった。
- ・ セミナー内容もわかりやすく説明も丁寧だった。
- ・ 意見を述べやすい空気作りでありがたかった。とてもわかりやすい説明だった。



(4) ラップ（元気回復行動プラン：WRAP®）体験クラスワークショップ

講師：小川雅代（名古屋市立大学大学院看護学研究科・講師）
田端恭兵（名古屋市立大学病院・精神看護専門看護師）

日時：令和元年11月16日（日）13時～17時

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：20名

参加者：8名

参加費：2,000円

〈内 容〉

本セミナーの目的は、医療保健福祉職者に WRAP を体験してもらうことである。

WRAP は精神障害を有する当事者主体で開発されたものであり、現在では、病気の有無にかかわらず誰もが自分で自分を元気にする（リカバリー）ツールとして広がってきている。WRAP の研修会などを見ていて、当事者はスムーズに WRAP を理解している様子であるが、それに反して医療職者は WRAP を理解することが難しい人が一部いることに気づいた。WRAP の活用にはリカバリーを理解しておく必要があると考え、本ワークショップを企画した。



(1)講義①リカバリーと WRAP

精神障害は病理だけにとどまらず生活障害や社会的不利を引き起こす。リカバリーは、当事者自身によって自覚される、生活の復活や生活の充実などのプロセスであり、一人で成し遂げられるものではなく、支援と連携が必要である。リカバリーが人生の目的であり、病気の管理や健康はそれを達成するための手段である。支援者は、対象者がリカバリーし、彼ら自身の人生を変換する能力を持っていると信じるのが大切である。WRAP は不快で苦痛を伴う困難な状態を自分でチェックして、プランに沿った対処方法を実行することでそのような困難を軽減、改善あるいは解消するための系統だったシステムである。

(2)講義②WRAP やってみた

WRAP の目的は、リカバリーの方法、セルフマネジメント技術・戦略を身につけることである。いつも元気を目指さなければならないのではなく、「いい感じ」の自分を保てるようにするのが WRAP である。

WRAP の作り方について実例を紹介しながら説明した。

(3)WRAP クラス体験

以下の内容について体験してもらった。

チェックイン：WRAP クラスに入るといふころの準備

呼ばれたい名前：WRAP では呼ばれたい名前（こんな存在でありたいという気持ちの表れ）で自己紹介を行う

安心のための同意：WRAP クラスに安心して参加できるように参加者全員で作成する
いい感じの自分：「いい感じの自分」について思い浮かんだことを発表し共有する

元気に役立つ道具箱：「いい感じの自分」でいるために必要なことについてアイデアを発表し共有する

〈アンケート結果〉

参加者 8 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったのは「自分の看護のレベル・アップ」5 名（62.5%）「興味・関心があった」の 5 名（62.5%）であった。また、セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」「どち

らかといえはわかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・前半の講義のスライドが分かりやすかった。後半の体験では楽しくできた。
- ・資料も見直しやすく、良かった。
- ・楽しんで学ぶことができた。
- ・全てをやることはできないかもしれないがエッセンスは持ち帰れると思った。



3) 課題

今年度は、昨年度からの引き続きのセミナー6件に新規の看護実践セミナー1件を加え、7件のセミナーを開催した。全体評価では参加者から高い評価を受けられ、参加者のニーズに沿ったものであったと考える。

新たな試みとして、休日開催であったセミナーを平日にしたり、夜間帯に複数回行っていったセミナーを集約して平日1日開催としたりして、受講しやすい日程とした。しかし、セミナー開催が同月に複数回となったため、受講者から日程調整が難しいという意見が出された。また、天候不良による日程変更があり、講師との調整で休日開催から平日開催になったため、参加が難しくなった受講者もいた。次年度は、受講者が複数のセミナー（特に看護研究セミナー）に参加できるよう平日1日開催のセミナーの日程を考慮する。天候不良等による不測の事態を想定した対応についても検討する。

参加者アンケートでは、受講料に対する意見も求めた。その結果、すべてのセミナーで安い・比較的安いという回答が得られた。近隣大学や学会等が開催する同様のセミナーの受講料に比べても安価であったため、次年度より増額することとした。これに関しては、今後の参加者アンケートで評価していきたい。

また、患者急変対応については、受講者の意見をもとに、これまでのベーシック編に加えてアドバンス編を開催することとした。講師の意見を反映しながら開催方法を検討する。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：宮内義明、小川雅代、吉松由子

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。また、本年度はなごや看護学会との共催として、下記の通り準備を進めていた。しかし、令和2年2月中旬より、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大が憂慮される状況となり、参加者の安全を考慮して中止(期日未定延期)とした。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	テーマと講師選定について検討、交渉 チラシ(案)の作成 講師決定、開催日時決定、会場予約
6月	テーマと講師の決定 チラシ送付先の検討
7月	公文書発送 印刷枚数の検討
8月	封筒宛名印刷
9月	チラシ原稿確認 広報なごや12月号掲載依頼 企画広報課へプレスリリース依頼
10月	印刷発注(1,400部) 広報なごや1月号掲載依頼
11月	チラシ納品、チラシ発送 募集開始 当日のスケジュール、役割分担の検討 参加申し込み状況、準備状況、アンケート内容の確認 講師への最終確認書類の発送
12月	看護実践研究センターホームページ・全学部ホームページ告知開始 名市大病院前会場案内看板、ステージ講師紹介印刷
2月	プレスリリース(名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブ) 配布資料到着 中止(期日未定延期)の決定、参加申込者および講師への連絡、看護学部ホームページ掲載(2/18)

2) 事業の実施予定内容

テーマ：ワーク・エンゲージメントで仕事にやりがい！職場も生き生き！

講師：島津明人（慶応義塾大学総合政策学部・教授）

日時：令和2年2月27日（木）18:00～19:30

場所：名古屋市立大学病院 大ホール

参加費：1000円（なごや看護学会員；500円）

3) 課題

前述の通り、開催予定日が新型コロナウイルスの感染による肺炎（COVID-19）の流行時期と重なったため、中止（期日未定延期）としたが、中止決定前の参加申込者（事前受付者）は41名であった。共催としたなごや看護学会会員の参加申込者はその内の7名であった。未開催ではあるが、例年の参加者数と比べると少ない事前受付数であったことから、原因の分析と対策が必要である。

参加申込が少なくなった原因として、①今年度は参加費を500円から1,000円に値上げしたこと、②事前受付期間に既に新型コロナウイルス感染が脅威として多く報道されていたこと、などを考えているが、今後も原因について検討が必要である。

今回の講師には来年度、同テーマで公開講演会を企画・開催したい旨を伝え、了承を得ている。来年度は、参加者を増やす対策の検討が必要である。

3. 地域連携セミナー

担当：脇本寛子、小田嶋裕輝

「地域連携セミナー」は、市民の皆様と保健医療福祉関連職種の方々が連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
10月	テーマと講師の選定、講師との交渉
11月	講師・テーマ等の決定
12月	チラシ(案)・申込方法・配布先の検討
1月	広報なごや4月号への掲載依頼 看護実践研究センターホームページで募集告知
2月	企画広報課へのプレスリリース依頼
3月	名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブへのプレスリリース チラシ原稿最終確認、印刷依頼(1,200部) 全学ホームページで募集告知 参加者募集開始(FAX、インターネット) 参加申込者への参加の可否連絡
4月	チラシ発送 講師依頼状発送
5月	当日役割分担の検討 講師へ当日資料等の最終連絡
6月	準備状況、参加申し込み状況の報告
7月	事前受付リスト作成開始、領収書発行の依頼 配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施状況

テーマ：『がんとともに働く』ということ

講師：室田かおる氏（名古屋第二赤十字病院・がん性疼痛看護認定看護師）

日時：令和元年7月27日（土）13時00分～15時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 308講義室

参加費：500円

参加者：52名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

がん治療と仕事との両立について、支援の実践事例を具体的に紹介いただいた。人口動態からがんを経験しながら生活している人々が増えている現状、第3期がん対策推進基本計画における「がん患者等の就労を含めた社会的な問題」の位置付け、がんの診断・告知

を受けた時、治療中、職場復帰時の各時期における支援のポイント、がん患者の就労問題の現状と課題について、データや実践事例をもとに詳細に紹介いただき、がん患者の就労支援に関する知識を深めることができた。

3) 参加者アンケート結果

参加者 46 名のうち、44 名から回答があった（回収率 95.7%）。参加者の一般の方の多くは会社員 6 名（13.6%）、医療・福祉職の方の多くは看護職 22 名（50.0%）であり、他に保健師、ケアマネージャーが参加していた。参加動機は「興味関心があった」と答えた人は 26 人（59.1%）であり、「新しい知識を得る」19 名（43.2%）であった。

以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 専門家からみた内容と患者の立場に立ってみた内容の両方の視点に立った講演で非常に良かった。
- ・ 職場にがんを告げるタイミング、告げ方、がん相談支援センターの活用法など、どこにポイントを押さえればよいか分かった。
- ・ 医療側が企業側に何を求めるのかが良くわかってとても参考になった。
- ・ 就労支援という取り組みがあることを知った。がんと共に働ける企業にできるよう考えさせられた。
- ・ 医療者としての支援のポイントがとてもわかりやすく盛り込まれていた。
- ・ がんと自ら発することが困難であるため、その人の気持ちになって接していけるようになりたいと思う。



4) 課 題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。参加者のアンケートによると来年度の講演会についての希望は、「在宅医療」「ACP」「ターミナルケア」などであった。市民の皆様や保健医療福祉関連で働く皆様が何を求めているのか、いただいた意見を反映できるようにテーマを企画していく必要がある。

4. 看護研究サポート

担当：原沢優子、脇本寛子、福留元美

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学研究科の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【令和元年度看護研究サポート】前期 新規 1 件、継続 3 件
後期 継続 1 件 計 5 件(新規 1)

時期	内容
4 月	研究の募集開始（案内の発送、ホームページへの掲載） 平成 30 年度実績の HP 掲載
5 月	研究の募集締め切り サポート教員の募集開始 サポート教員の募集締め切り 研究チームとサポート教員のマッチング 結果をメール配信
6 月	後期募集計画の検討
7 月	研究サポート後期募集について提案 サポート中の受講者・担当教員からの要望への対応を提案
8 月	サポート状況の中間確認の実施
9 月	中間確認の結果報告 後期研究サポートの募集（10/29 締め切り）
11 月	研究チームとサポート教員のマッチング：継続 1 件を個別調整 研究サポート開始（11 月～令和 2 年 9 月末） 研究テーマと担当教員の報告
2 月	後期研究サポートの中間確認の結果報告
3 月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ（3/2 締め切り）

2) 事業の実施状況

今年度の 4 月案内の応募件数は新規 1 件（スタンダード 1 件）、継続 3 件（ショート 3 件）であった。年間サポート予定件数を満たしていないため 10 月の募集を行い継続 1 件（ショート）の申し込みがあった。今年度はすべて名古屋市立大学病院所属者の申し込みであった。

サポート教員は、継続のテーマがほとんどであり教員は前任者が引き続き担当した。新規テーマは専門性に沿った適任者に受諾された。

研究サポート状況は、昨年度後期開始分の 1 件についてショートコースのサポート時間

の倍にあたるサポートが実施されていた。サポート教員に確認したところ時間について把握していたが予定を超えてしまった。指導側の理由もあり負担はなかったとの回答であった。また、本研究チームは期日までに報告書の提出がなく数回にわたり催促を行った結果、PCの使用環境が変わり報告書の添付提出が困難と回答され文字だけでの報告文書を送付していただき、センター事務が報告書として作成した。また、研究チームの準備不足により指定時間数より不足した1件があったが意見などはなかった。その他は意見なく終了した。後期開始分は、中間調査時点で未開始であったが問題はなかった。

教員経費の使用方法について、あらたに文献複写費の申請方法の説明を追加した。

サポート教員の研究にかかる経費は、すべて執行された。

研究成果の広報について、昨年度の実施修了者から公表の承諾があったチームについてHPに公開する予定である。

看護学部事務室からの問い合わせで名市大病院からの受講料の引き落とし日について質問があった。前期は6月、後期は11月がサポート開始でありサポート開始月の徴収が大学側の支払日として確認した。

3) 課題

本年度は、名古屋市立大学病院以外のサポート申し込みが0件であった。なごや看護学会等と協働し、近隣病院からの受講者のニーズを把握する必要がある。

教員からの意見に名古屋市立大学病院チームは師長のメールアドレスを使ってやり取りをしているが、直接のやり取りをしてよいかと質問があった。これに対して市大病院の師長を通して連絡を取るルールを説明し、理解を得たが今後も同様の質問があると想定されるため、市大病院の場合のルールをサポート開始時に伝える必要がある。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：小川雅代

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で5回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	昭和生涯学習センター担当者との講座開催方法の検討 (実務は指定管理者である名古屋市教育スポーツ協会が担当) テーマと講師の選定、講師との交渉開始(メール・電話で検討) テーマ、講師、開催日時決定 知の広場掲載依頼
7月	広報、参加者募集開始(名古屋市教育スポーツ協会担当者)
9月	講師への依頼書発送(名古屋市教育スポーツ協会担当者)
1月	昭和生涯学習センター担当者と共に使用教室などの最終確認
3月	看護実践研究センターホームページに開催報告掲載 全学ホームページに開催報告掲載

2) 事業の実施内容

令和元年度後期昭和生涯学習センター事業として、「いつまでも『健幸』でいきいきと！～今からできる健康実践講座～」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は96名であった。2回目以後は有料(受講料：900円)で、応募者96名から抽選で50名の受講者が選定された。

開催日時	内容	講師
1月31日 14:00-16:00	健康寿命を延ばすための生活術：食べること、運動すること、人と話すこと	山田紀代美(名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授)
2月7日 14:00-16:00	健康を維持するための食事と服薬：身体の細胞をいきいきと保つために	小田嶋裕輝(名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授)
2月14日 14:00-16:00	加齢に伴う体の変化と運動上の注意：安全に運動して、体の機能を保つために	薊隆文(名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授)
2月21日 14:00-16:00	超高齢社会における排尿の問題：頻尿・尿もれについて	窪田泰江(名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授)

3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りであった。

第1回公開講座については、参加者96名にアンケート用紙を配布し、80名から回答があった（回収率88.9%）。講座の内容について「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と答えた人が72名（90.0%）と高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・少し難しいところもあったが勉強になった。
- ・聴力、補聴器に関することが非常に参考になった。
- ・視力の低下が健康年齢に影響大で有る事はとても興味深かった。

第2～4回目までの連続講座については、最終日の参加者39名にアンケート用紙を配布し、全員から回答があった（回収率100%）。講座の内容、講師の指導、講座全体の満足度について全員が「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と回答し、高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・テーマが身近で大変参考になった。
- ・幅広い範囲で健康、疾病対策の知識、実践を知ることができた。
- ・話し上手な先生が多く、大変わかりやすくユーモアを交えて講義してくれた。



4) 課題

昭和生涯学習センターの担当者から、今後も共催講座を継続したい旨の申し出があった。市民のニーズに合ったテーマを選定するとともに、看護学研究科教員の専門性を活かした講座となるよう協力して実施していきたい。

Ⅲ 今後の課題

本センターは、名古屋市立大学大学院看護学研究科と名古屋市立大学病院看護部が行う社会貢献事業の企画・運営の役割を担っている。各事業の実績と課題をふまえて、教育研究成果の還元を通じた地域・行政の課題解決や生涯教育の推進による地域社会への貢献がますます期待されているところである。

本年度の新しい試みは、事業の一つである「なごや看護生涯学習講演会」をなごや看護学会（平成 30 年 4 月設立）と共催することであった。本センターが企画したテーマや開催方法について、収支の分配方法を含めてなごや看護学会理事会で承認を受け、令和 2 年 2 月 27 日に講演会を開催するよう準備を進めていた。しかし、同年 2 月初旬より新型コロナウイルス感染症の感染拡大が憂慮される状況となり、やむを得ず中止することとなった。この経緯において本センターとなごや看護学会との連携に問題はなく、準備に要した費用も両方で負担することとした。しかし、なごや看護学会との共催によって期待していた参加申込者の増加は得られず、広報方法を含めて本センターとなごや看護学会との連携のあり方をさらに検討する必要がある。

ところで、平成 31 年 4 月に施行された働き方改革関連法では、長時間労働の是正と多様で柔軟な働き方を実現するために、時間外労働の上限規制の導入や年次有給休暇の取得義務などが課せられることとなった。これにより業務に密接に関連する研修等への参加は、労働時間とみなされる。本センターの各事業の主な目的は、現場で活躍している保健医療職者の専門性を高めることであり、参加者の業務に関連しているといえる。しかし、各事業の参加者アンケート結果からは、ほとんどの参加者が勤務を調整して自主的に参加していることがうかがえた。そしてどの事業も、参加者から高評価が得られた。すなわち、自分の時間とお金を使って自主的に参加する価値のある事業と評価されているといえる。その一方で、各事業への参加者数は例年と同様であったが、いずれも募集人数には至っていない。年度ごとの評価に加えて、数年間の傾向を踏まえて、各事業を企画する必要がある。

令和元年度看護実践研究センター運営委員会

センター長 明石 恵子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
運営委員 小川 雅代 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
小田嶋裕輝 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
杉浦 和子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
原沢 優子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
福留 元美 (名古屋市立大学病院看護部)
宮内 義明 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
吉松 由子 (名古屋市立大学病院看護部)
協本 寛子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
事務職員 小林真理子

名古屋市立大学看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>